

論文の内容の要旨

論文題目 中国絵画の内と外

氏名 宮崎 法子

本書は、宋代仏画研究、花鳥画・山水画の寓意とその伝統社会における意義に関する研究、元明清時代の文人画研究、近代における中国画コレクションの形成に関する研究、日中美術交流に関する研究など、著者の中国絵画史に関する諸テーマの研究成果を整理し、総合的かつ多角的に中国絵画を捉えられるように再構成し、二部構成としてまとめたものである。各論は、いずれも、中国の絵画を含む文化活動と深く関わっていた中国の社会システムのなかで、絵画が果たしてきた役割への関心と、それが作品の表現の特徴にどのように表れているのか、という美術史的な視点に基づいて、具体的事例や作品に即して考察した論考である。

第一部は、絵画を取り巻く世界（社会）との係わりに重点をおいて、中国絵画を論じ、第二部は、絵画作品そのものの美術史的な様式分析を、作品や画家をとりまく状況、制作背景と関連づけながら論じる。

第一部、中国絵画をめぐる世界では、以下の章立てに従って、まず、中国の伝統社会において絵画が果たした役割を、ジェンダー的視点や画題の意味に着目することで解き明かす。次いで、日中の美術を中心とした非対称の交流を、歴史的に概観し、絵画をめぐる両地の状況の違いから分析する。最後に、近代における新たな地政学的状況下での、中国伝統美術の状況と展開、日本における評価や研究について論ずる。

第一章 山水、人物、花鳥の主題と社会

- 一 女性の消えた世界
- 二 中国山水画の内と外
- 三 中国における女性描写の展開
- 四 花鳥画の役割と意味—藻魚図、蓮池水禽図、草虫画にみる寓意を中心に
- 五 歳寒三友と四君子

第二章 中国文化圏のなかの日本—非対称の文化交流

- 一 伝統中国から見た日本美術
- 二 明代蘇州の園林文化とその伝播—呉派別業図から大名庭園へ
- 三 日本伝来の作品からみる明代の「偽好物」

第三章 近代における中国絵画

- 一 近代日本における文人文化熱とその消長
- 二 日本近代のなかの中国絵画研究

- 三 桑名鉄城の訪中と「安晩帖」の伝来について
- 四 『吉祥図案解題』と野崎誠近
- 五 中国美術の近代

第二部、作品の世界を読むでは、以下の章立てによって、宋元、明清と時代ごとに、山水画、人物画、花鳥画から、各時代やジャンルを代表する画家や作品を取り上げ、宋代から清初に至る中国絵画を展望する。各論においては、日本の研究が培ってきた作品の描写様式の分析を基礎に、落款印章、題跋文、画史類や、関連する詩文、著録、地方志などの文字資料を援用し、絵画作品を具体的に読み解く。その際、画家たちが生きた環境や時代との関連を視野に入れて論じることにより、全体を通じて中国絵画史の展開を示した。また、特に明清画については、従来日本の研究では取り上げることの少ない、日本伝来品以外の代表的名品を取り上げ、様式分析と文献研究の両面から考察を行った。

第一章 宋元時代の道釈画と人物画

- 一 伝奄然将来十六羅漢図考
- 二 山西省の寺観壁画—北宋から元まで
- 三 静嘉堂文庫美術館蔵「十王図・二使者図」について
- 四 交差する視線—宮中図を中心に
- 五 「清明上河図」の過去と現在—今後の研究に向けて

第二章 宋元時代の花鳥画・山水画

- 一 崔白「双喜図」について
- 二 元「花鳥図」（オーストラリア国立ヴィクトリア美術館蔵）について
- 三 上海博物館蔵「西湖図」巻と北京故宫博物院蔵「西湖草堂図」巻について
- 四 南宋宮廷絵画における文人意識—画院画家の二つ画風について
- 五 「瀟湘臥遊図巻」から趙孟頫へ

第三章 明清時代の絵画

- 一 呉派初期の別業図—沈周「東荘図」冊を中心に
- 二 「韓熙載夜宴図巻」と明代江南人物画
- 三 「雲溪仙館図」「仙山樓閣図」から見る仇英山水画の展開
- 四 徐渭の作画の背景—日本伝来の浙江地方の墨戯との関連を中心に
- 五 董其昌山水画における実景—「婉孌草堂図」を中心に
- 六 八大山人の甲戌（一六九四）年
- 七 石涛と「黄山図巻」